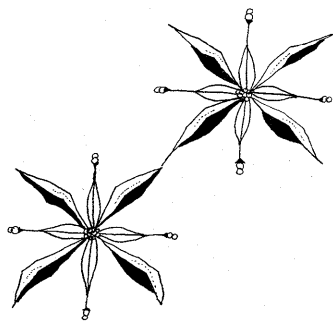


日々の保育の狭間で

矢萩 恭子

保育実践と保育研究の在り方との関係、“書く”という記述行為と“書く”主体との関係、意識作用と認識内容との関係、精神と身体との関係、言語化され言葉に掬い取られたものと言葉の網の目からこぼれ落ち言語化を免れた現象、事実として感得され得るものと真実と予感されるものとの差異、理解へと志向する主体と理解の妥当性、主―客の相克などなど、観念の迷路にはまり込んで身動きのとれない時期があった。保育者として生身の人間としての子どもと関わりつつ、その体験の中から動かし難い感覚として絶えず私の心に責めざあっていたものたちが、出口を求めてもがいていた。



今こうして毎日を、まるごと現象の中に過ぐす身となって、当時抱えていたような“引っ掛かり”が恐ろしいほど消え失せてしまった。大勢の子どもたちと時間に区切られた忙しさの中で体力勝負の生活を送っていると、一つひとつをゆっくりと反省し考察している余裕がない。余裕がないなどと言うのは自己欺瞞である、と謙虚に戒めているゆとりさえないような気がする。ああ、明日もあの子たちに会えるという喜びと期待で眠りにつける日が少しずつ増えてきているのがせめてもの救いである。精一杯の思いで子どもたちと共に一日を生きて、肉体の疲労を与えられた生活のささやかな充実感が慰めてくれ、そしてまた次の日があるという小さな小さな喜びが今の私を支えてくれている。

もちろん、以前に比べて子どもの思いを受け止め、他者を理解する力が増大した訳でも

なければ、自分という存在や出来事の意味についてケリがついた訳でもない。相変わらず、自分は「わからなさ」の中に佇んでいるただの無力な一人に過ぎない。

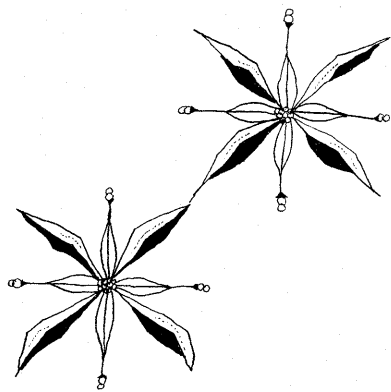
“子ども”という現象が客観的事実なのか、主観としての自分が編み出した意味や文脈に過ぎないのか。厳然としてある個の領野を越えて、他者と交わり、他者を理解しようと志向するためには自己と他者との越え難い断絶をどのように埋めていったらよいのか。偏見や憶測、誤っているかもしれない判断から逃れて、真に相手の存在に迫るにはどうしたらいいのか。そんな二元論的な問題設定はほとんど機能しなくなったような気がする。正直言ってそれどころではないのである。“子どもと自分”というシンプルな関係項は、大勢の子どもたちと自分、子どもと子ども、子どもと母親、母親と自分、子どもと現代の社会、保育者集団と保育現場といったようなさまざまな関係の連鎖の中ですごく複雑になってしまったような気がする。とは言うものの、子どもと自分との関係から出発して営まれる保育の実際において、その極めて個別な、一回性の、主観的体験をもとに「私」という個の枠から歩み出て、研究者としてであれ、実践者としてであれ、他者との対話を開く為には、私はどうしたらいいのだろうか。

かつて私はこのことについて保育者の記述行為ということを通じて考えようとした。保育者とすればとにかく子ども自身の主体的な活動を尊重し、それに寄り添いながら自分も存在することで、ひたすら子どもの求めていることや、子どもの抱いている感覚や気持ち

現在、私は幼稚園の一教諭として、保育実践を文字化する作業に未だに苦勞し続けている。忙しい毎日の中では情けない位、貧しい内容の記録しか記すことができない。今日の一人ひとりの行為に思いを馳せ、明日からの保育を考えるゆとりのないままに次の日が来てしまうことも多い。それでも何かしら心に残った出来事や、後になっても突っ込んで考えてみたいこと、反省すべき自分の言動などについては記述しておきたいと願う。保育は、実に眼に見えにくい繊細な配慮、眼差しのもとで行われる、因果関係のように具体的

な成果を見出しづらい営みであると思う。だからこそ、人間としての基盤を築きながら生きる若い人達の混沌さ、意味不明さの傍らにあつてともに生活し、考え続ける価値がある。

今や、保育者を目指す十代の学生たちの実習日誌なるものを読ませてもらいながら、その日その場で流れ去ってしまう自分の保育の実際と体験、そして記録について再び考え始めてゐる。



(洗足学園大学附属幼稚園)